ある集い・その足あと

チェーングループ

角本（かどもと）　稔（みのる）
〈神戸観光汽船勤務・チェーングループリーダー〉

私達のグループは、東京オリンピックの行われた昭和39年に発足しました。その年の春に、船長資格の試験があり、私は海技免状を手にするべく、夜間の講習に通いました。その時偶然に同席した4名の仲間は、試験合格まで互いに励まし合い苦労を分ちあっただけに、このまま別々になることが惜しく、その絆を大切にしようと他の友人にも声をかけて暮れに忘年会を開いたのです。その時集まった10名が意気投合し、これを機にグループを結成しようと決定。

まず名称から考えました。港で働く海の男の集まりであり、「メンバー各自がお互いに強く引っ張りあいしかも、海の社会の底深くまで錨を降ろす」との考えから『チェーングループ』と命名。その後、毎月1回集合し、規約を作り、会費も決め、本格的な会としての活動を始めました。会員数も増えて多い時には女性も加わって20名をこえた時期もあったのです。

当時の若い船乗りの大半が地方出身者のため、陸（おか）とのつながりも少なく、皆が孤独でした。船員修業は厳しく早朝から深夜まで仕事に追われ、楽しみらしいもののない毎日だったのです。今、考えると、私達の青春は「ねぐら」の感が強かったといえるでしょう。

グループ結成以後、私達は互いに知恵を出しあい、休日も皆にあわせて行動を共にしました。有馬温泉一泊、修法ケ原ハイキングやキャンプ、ボーリング大会など、個々の船員としてはとても不可能なレクリエーションを楽しむことができました。今ではその一つ一つが青春のアルバムの一頁を飾る記念すべきものとなっています。

やがて会員が結婚適齢期を迎え、グループ内での愛の芽生え、相手の紹介、悩みの相談やアドバイスと会員同士フルに活躍し、私も結婚披露宴の司会役で何回となく引っ張り出されたものです。

しかし、長い間にはグループがマンネリ化し思うにまかせず、一時期途絶えかけたのですが、7人の侍が頑張って、チェーングループを守ってきたのです。

家庭をもち、貯蓄もでき、会員が家を購入すれば引越しの手伝いやお祝いに駆けつけたり、青春期から培った仲間意識は実に気のおけない和気藹々たるものでした。

船という閉鎖社会から飛びだして、青春を満喫し、経験したことはメンバー各自の前向きの考えを養い、幅広い人間形成にも役立ったのでは…、と自負しています。

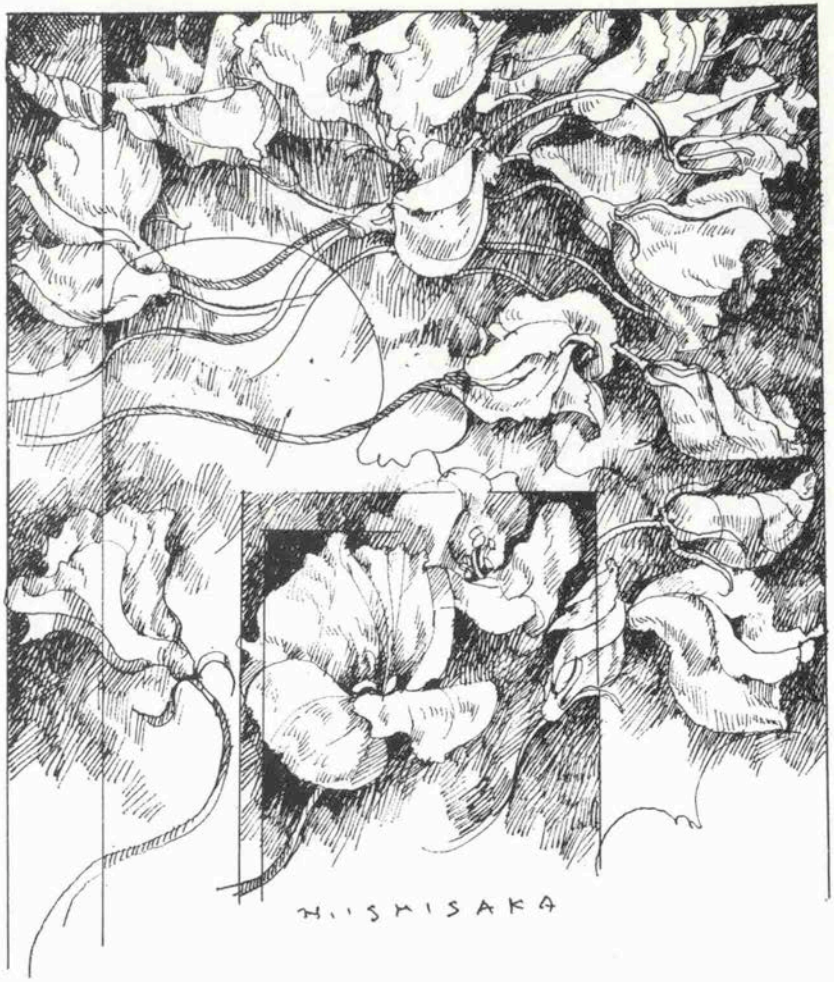
時の流れと共に、各自が子どもに恵まれ、海の男たちは現在は実に良きパパとなりました。一昨年の夏には親子27名が初めて六甲荘に全員集合。その時の印象がとてもよかったのか、家族同士の会を再度開いてほしいという声が、奥さんや子ども達からも強くあり、今夏、盛大な集いをもつ予定で今から計画を練っている次第です。

といっても次回からは「チェーングループ」の二世たちに、大いに期待を寄せている私達なのですが……。

56年夏、神戸・六甲荘でファミリー全員集合

詩心象

詩・安水　稔和
画・石阪　春生



まつとしきかば

男が形見に烏帽子と狩衣を
松に掛けて立ち去ったとい
う言い伝えのある町で私は
生まれた。いまはいない兄
も妹も犬もいまはないあの
町のあの家で生まれた。

いまはいないものたちよ私
は生きているここにいると
呟いて潮風の道を歩めば。
熱い雨が記憶の屋根瓦を音
高く打ち据える。熱い風が
記憶の垣根をいま焼く。

●れんさいエッセイ Wakakoの神戸はKOBE〈2〉

東は東、西は西

小原稚子〈小原流理事・国際部長〉 絵／上尾忠生

もう四年前になる。小原流の支部がヨハネスブルグで発会することになり、南アフリカ共和国という日本人には馴染みのうすいところに行くことになった。

飛行機に二十数時間も乗って着いたヨハネスブルグは、アフリカは猛獣の国というイメージとは縁遠い大都会であった。整然と建ち並ぶ高層ビル、幅広い道路、青く澄んだ高い空——それらはニューヨークでもロンドンでもない、ましてや東京でもない独自の雰囲気をもっていた。

よく「見ると聞くとは大違い」という。新聞などで報道される人種差別の国は、緑濃く、人情味豊かで、食べ物もワインもおいしく、広い土地で総てのものがゆったりとしていた。

首府プレトリアに行き、またヨハネスブルグに戻った私たち一行四名には、まだダーバン、ケープタウン、そして南西アフリカ（ナニビア）のヴィンドックにある各支所をまわるスケジュールが待っていた。なにしろ国が広いので、南アフリカ支部の名のもとに各地に支所をおくことにした。

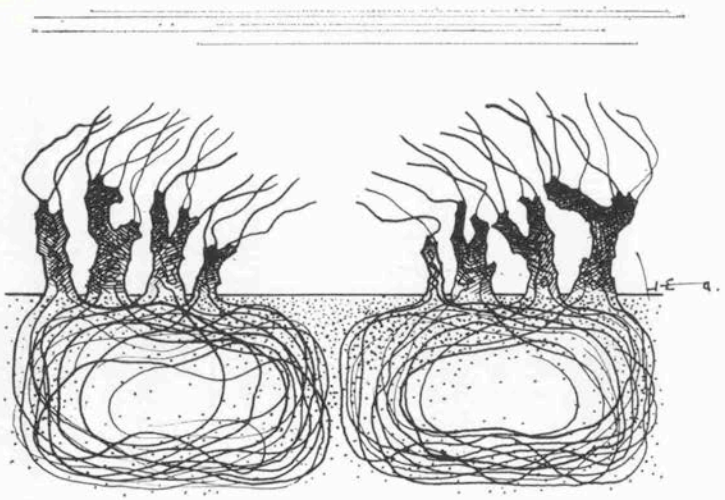
インド洋に面した低地で、むし暑いダーバンを経て、あの喜望峰のあるケープタウンに着いた。喜望峰という名は、バスコ・ダ・ガマの名前とともに、小学校の頃から歴史の時間に耳にし、また地図をながめて、遠いところだなあと漠然と思っていた。そんな〝地の果て〟に行けるようになろうとは夢にも思ってはいなかった。

そのケープタウンは、ひとことでいえば、〝ヨーロッパ以上にヨーロッパらしい〟街であった。植民地という感覚ではなく、ヨーロッパそのものが息づいているといったらいいだろうか。しっとりとした街並、ゆったりとしてエレガントな雰囲気、シックな英語——何十年か前のロンドンはきっとこんなだったにちがいない。

仕事の合い間に半日ほど時間があいた我々は、〝あこがれ〟の喜望峰に向った。ケープポイントといわれる最先端に行ってみようというのである。

久しぶりに仕事から解放されて、まるで子供が遠足に行くような気分だ。だんだんポイントに近づくにつれ、道は細くなり、くねくねと曲がりだした。南に向って左がインド洋、右側が大西洋。インド洋側を車が走っているときは暑くて湿気を感じる。大西洋側に出るとさわやかで、むしろひんやりとする。海洋の温度によって、こうも気候がちがうということが道が曲がるたびに感じられる。海の色もインド洋はグレーに近いブルー、大西洋はエメラルドの濃く透明なグリーンだ。

いよいよケープポイントについた。砂地のパー



キングに車を止め、歩いてポイントの展望台に行く。日本とちがって、おみやげ品を売る店もなく、けばけばしい装飾も展望台にはない。先端の岩場をコンクリートでかためただけである。この付近は二つの海洋があるので、天気が変りやすいらしい。霧雨が降りだしていた。私は小走りで数人の観光客しかいない展望台に近づき、石段を登った。

「あっ！」

思わず私は声にならな声でさけんでいた。なにか体内いっぱいにそのエコーが響いたように思った。眼下に果てしなく広がる海が二つ見えるので右がエメラルド、左がブルーグレーにくっきりと色分けされた海面は、二つの海流が混り合うことなく、その接点が盛り上るように一本の線になっているではないか。遙々下ってきた各々の海流は、音もなくまたきた方向へと戻っていく。

海の流れが交わらない！そんなことがあろうとは考えてみたこともなかった。空のように海は一つだと信じて生きてきた。

もう帰る時間だとうながされても、去りがたく私はそこに立ちつくしていた。その夜は仲々寝つけなかった。頭の中で二色に鮮やかに色分けされた海がグルグルとまわっていた。

私は国際都市といわれる神戸で育ち、インターナショナルな学校で教育を受けた。そしてアメリカに四年間留学もした。私のなかで東と西は何の異和感もなく一つになっている。日本の伝統芸術であるいけばなを海外に普及させる仕事を通して、国際親善と理解を深めることを目的としている。いけばなを愛する外国のひとたちとの心の交流を日々に体験する。そんなとき、ふとあのケープポイントの〝二つの海〟が脳裏をかすめる。そうだ、あのとき、高校時代に習ったキプリングの詩を思い出していたのだ。

"East is East, and West is Wests
They never meet……"（東は東、西は西、
両者はけっして交わることがない――）

これは本当のことだろうか。いや、海がそうでも、キプリングがそう詠んでも、私のなかの〝東〟と〝西〟はひとつになっている。それは、あのはるかな南アフリカの各地で熱心にいけばなと取り組んでいる会員たちの表情が〝東と西はひとつ〟といっている確かな手応えが私にはあるからだ。

●さわやかインタビュー

家庭問題研究機構の設置を急ぐ

小笠原 暁さんを訪ねて

〈兵庫県副知事〉

現在、兵庫県では近年さまざまな問題が増え続けている家庭に目を向け、「幸せな家庭づくり」に積極的に取り組んでいる。今月は、家庭問題研究機構の設立、又家庭問題の研究調査を始めた小笠原副知事をインタビュー。

環境が変化した中で家庭問題研究機構の設置を

――「家庭問題研究機構」をつくろうと思われたきっかけをお聞かせください。

小笠原 家庭問題研究所なり研究機構は、日本にはまだないのですが米国、豪州などではすでにできています。日本でも個人的に家庭問題に関して研究している人はたくさんいるのですが、アメリカから日本人研究者のリストをもらったぐらいで（笑）横の連携があまりなくて、諸外国の人が日本と比較・共同研究するのにコンタクトをとる方法がなく、そういう場をほしがっています。また、私自身家庭問題に関して自由に意見を交換できる場が必要だと思うし、系統だてた大掛りな調査もしたいですしね。

――日本での家庭問題といいますと、具体的には？

小笠原 今、言われているのは、一つは高齢者の問題と、もう一つは青少年の非行の問題です。今は、特に非行問題が大きく取りあげられていますね。例えば「昔の家庭はこうだった。躾はこうだった。しかるに今は何たることだ。」いわゆる親学というか親がもっとちゃんと子供を教育しろ、という形で家庭の教育力の低下が言われています。しかし私は決して昔の親にくらべて今の親の教育力が低いとは思わない。親と子を取りまく環境が違ってきたと思うのです。昔は、世の中全体があまり豊かではなかったし、子供の数も多かったので何でも思い通りにならなかった、だから、そこで子供たちは我慢することを覚えたし、今みたいに家庭電化が進んでいないから子供たちが家事の役割分担を持っていた。そうしないと家庭生活が成り立たなかったわけです。

――その中で訓練されていたわけですね。

小笠原 もう一つは、昔は父親中心で世の中が回っていた。父親がいないとみんな飢え死にしてしまう。事実そういうふうに父親が働いている姿を子供たちは見てるわけですね。母親も一生懸命針仕事をしたり、洗濯をした

りしている姿を見てるので、親の世話になっているという実感がありましたよね。ところが今や、父親がいったい何をやっているのか、親が子供たちにとってどういう存在かということが実証される機会がないわけです。このように環境が変わってきている中で、昔はごく自然にできた訓練ができてないということになる。ところで、家庭問題を考えるときにいつも言われることは、その問題を家庭の中だけで解決しようとしてしまうことです。だからもっと親が教育力を持ったらいいんだ、ちゃんと我慢させなさい、親を尊敬させなさい、とね。しかし、今はもう一般には通用しないわけです。

家庭問題をバックアップするシステムづくりを

——どのようにアプローチしようとされているのですか

小笠原　すべての親がそういう教育力をもっているとは限らないとするならば、それに替わるようなバックアップのシステムをつくらないと現代社会にマッチしていかないわけです。家庭問題研究機構においてそのようなバックアップシステムをどうつくったらいいか、それに関しての研究を前向きに行っていくことが急務でしょうね

高齢者の表情も生き生きと
<加古川市にある「高齢者陶芸の村」にて>

——一種の方法論を変えていくという感じですね。

小笠原　これは私の説ですが、社会の構造が変わってるならば、社会を支えるシステムも変わっていかないと旧体系のままで昔と同じようにしようとしてもできるはずがないんですよ。結局そういったシステムを考えて、そういうものを政策に転換するような提言をわれわれ行政側にしてくれるような研究機構ができたら素晴らしいな、と思いますね。また、どうしても必要なことなんですよ。

——高齢者の問題という面からはどうでしょう。

小笠原　家にお年寄りがいて寝たきりになりますと、家族が大変なわけです。医者に十分見せたくてもなかなか応診はしてもらえない。だから病院に入れちゃうんですよね。また付き添いの人を雇うのもお金が掛かる。それでやはり家庭の主婦が交代で病院に行くことになるのですが、何カ月にもなると家庭が放りっぱなしになり、家庭内のトラブルが起こってくるのですよ。こういった面からも例えば、応診をしてくれるとか、地域で週に二、三日そこの家庭の主婦を解放してくれるとかの形でバックアップをしてくれるシステムがやはり必要となります。

——この研究機構はいつ頃できるのでしょうか。

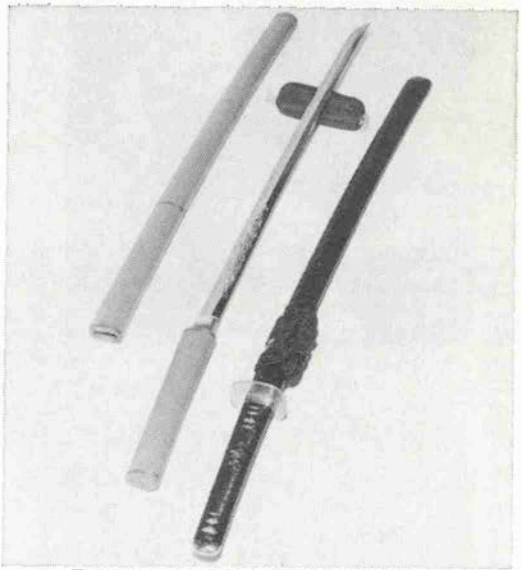
小笠原　来年をメドに設置したいと考えております。何しろ解決が急がれる問題ですので。家庭問題については、多分、とかだろうとか単なる推測で言われていることが多く、早く実態を把握しなければなりません。今、社会システムの中での家庭という問題が構造的に変化したにもかかわらず、バックアップシステムが完備していないということが社会問題の原因となっているとするならば、それに対する研究機構が必要だと考えています。また、社会の一番小さい単位である家庭というものを、単なる共同生活体というのではなく、皆で一緒に生きていくという昔からの運命共同体的な「家」としてもう一度見直して、それをよりよい方向へ発展させていくにはどうすればよいのか、みなさんにも考えて欲しいと思っております。

COOKIES

洋菓子の歴史を伝える神戸が
育てたフレッシュバター
たっぷりのクッキー

北欧の銘菓
ユーハイム・コンフェクト
■本社 神戸市中央区熊内町1-8-23☎221－1164

刀剣 古美術



刀 拵つき 銘／美濃守藤原政常(龍の彫物あり)
特別提供価格￥1,800,000
毎月20日　無料鑑定
研磨、白サヤ、その他工作
お支払いに便利なローンをご利用下さい。
兵庫県美術刀剣商組合事務局

刀剣の元町美術
神戸市中央区元町通6丁目6番3号
三越百貨店東へ150m 商店街山側
TEL 078-351-0081

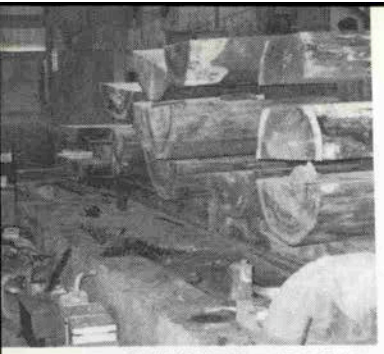
地域文化論

＜その47＞

歴史に埋れた天然資源

幻の山崎天杉

荻　大陸
＜東京大学農業経済学科研究生＞



▲魚梁瀬杉を高度加工する工場（高知県馬路村）この中にも、山崎天杉が混っているかもしれない。

揖保川の上流山崎営林署管内の赤西、音水には通称山崎天杉（宍粟杉ともいう）と呼ばれる樹齢二百年を越える杉がある。普通天然木とは人工植栽された木に対比していうのだが、実際は天然生のものなのか人手が加わって成立したものなのか判らない。記録もなければ伝承も残されていないからなのであって、だから天然木と称されるほどの木は高樹齢が相場となっている。そして今日の日本において百年生を越えるというような資源的価値の高い木は極端に少なく、まして二百年ものとなるとこれはもう宝石の中の宝石というに等しい高価値資源といえる。

現在日本に残っている資源的価値の高い天然木は秋田杉、高知の魚梁瀬杉、山崎天杉、屋久島の屋久杉、木曽檜、青森檜を数えるのみである（因に秋田杉、木曽檜、青森檜を称して日本の三大美林という）。してみると山崎天杉は他の秋田杉、魚梁瀬杉とともに日本の三大天杉と呼ばれていい筈である（周知のように屋久杉は千年以上の古木であり、普通一般の木からすれば奇木、変木の類であって同列視できない）。しかし秋田杉や魚梁瀬杉が天下の銘木として栄えている一方で、山崎天杉は地元兵庫のひとびとでさえその名を知るひとは少ない。

その理由は煎じ詰めると地元の加工業者がこの天杉に価値を見出さなかったからで、そのため天杉の大部分は丸太のままで他地域に流れてしまい、また天杉に価値を認めなかったがゆえに地元で加工されたものも商品価値の低い製品しか生み出しえなかったからなのである。例えば古くは大正末期から昭和初期にかけて、灘に出荷された山崎天杉の酒樽は清酒を混濁させてしまうとか酒を吸い込んでしまうということで取引停止の憂き目にあい、醤油樽として出されたものも色沢不良に加え時々醤油が浸み出すという欠点のため千葉県野田や小豆島などでは吉野杉や秋田杉、九州物に比して一段下等品扱いされていたという。しかも山崎天杉がこうした不良品しか生産しえない最大の理由は、乾燥の悪さと加工技術の拙劣さにあることを調査したのは加工業者達ではなく、当時の山崎営林署長だった。価値の低い製品しか生産されなければ、その原材料も安い評価でしか買ってもらえない営林署長にとっては、実に重大な問題であった。しかし営林署側の地元業者振興の努力は結局のところ実を結ばなかった。地元では天杉の価値を最大限に引き出す加工技術を育てあげることがなかったのである。

こうして戦後も山崎天杉の大半は地元で加工されることなく丸太のままで四国や中京地区へと流れ、そこで加工されることによって魚梁瀬杉や秋田杉として他産地のブランドものになっていった。天下の銘木としての資質を有しながら、山崎天杉がその名を一般に知られることがなかったのは、以上のような事情による。だがこのことはいまではもう取り返しのつかぬ状況に立ち至っている。山崎天杉の供給量はいまやほんのわずかとなり、その時代はすでに終ろうとしているからである。

ただ皆さんは、結局は原材料としてしか世に出ることのなかったその山崎天杉を今後も目にすることだけはできる。学術参考、保護林としてその一部が残されるからである。これからの季節、一度揖保川の上流を遡ってみるのはいかがでしょうか。

□巻頭インタビュー□

ソフトウェアをつくる夢のある工場を西神工業団地に

関本　忠弘〈日本電気株式会社 社長〉

――関本社長は大正十五年、神戸市のお生まれですね。滝川中学校、姫路高等学校から東大の物理学科へとお進みになって、日本電気へ入社されておりますが、以前から神戸には愛着をお持ちだと伺っております。西神インダストリアルパークに最新鋭の工場を建設する計画もお持ちですね。今日は、新工場の構想、先端技術の見通し、さらに神戸にまつわる思い出などご自由にお話しいただきたいと思います。

まず簡単に日本電気のご紹介からお願いします。

ソフトウェアの工場で西神工業団地に進出

関本　日本電気の歴史は八十四年になります。明治三十二年にアメリカのウェスタン・エレクトリック（世界で最大の通信機製造会社）との合弁で設立されたのですが合弁会社としては日本で初めての会社です。神戸風に言うとハイカラだったわけですね(笑)。それからズッと通信製造業をやっています。電子計算機を手掛けてからでも三十年になりますし、最近、IC（集積回路）が話題になっていますが、これも三十年前からやっています。

――神戸の西神インダストリアルパークへの工場進出についての構想をお聞かせください。

関本　神戸という土地は、一言でいえばハイカラというか、ファッションについては日本をリードして来たと思っています。私が神戸っ子だからそう言うのではないのですが（笑）私は誇りに思っているんですよ。

だから、そういうところに向いた工場を造ろうと考えておるんです。工場という名がついているのですが、ハードウェア（金物）をつくるんじゃないんですよ。一言でいうとソフトウェアをつくる。こういう工場を今、夢見ているんです。

ソフトウェアという言葉には幅広い意味があるのですが、例えばコンピューターのプログラムをつくるのもそうだし、雑誌を編集するのもそうですね。このソフトウェアがますます重要になって来ているのです。

最近は〝軽薄短小〟と言いまして、軽くて薄くて、短かくて小さいものの時代だとよく言われていますね。ソフトウェアというものは最も軽いんですよ。一例をあげますと鉄一トンの値段は約十万円前後ですが、自動車あたりで一トンの値段が一〇〇万円。これが半導体ICということになりますと一トンの値段が二十五億円と言われています。ところが、さらに今のソフトウェアの値段は端的に言うと一トンの値段は無限なんですね。〝軽薄短小〟の極がソフトウェアというものなんです。

ところが今までの日本の社会では、ソフトウェアというものがなかなかお金に換算してもらえない。相対的には金銭的価値が低いんですね。これではいけないということで、われわれはソフトウェアの価値を認めさせる運動をやっているのですよね。

ともあれ、神戸という昔からファッション性のあるところではそういうソフトウェアへの理解があるだろう、そういうセンスのある人が多いだろうと思っているわけです。また神戸大学をはじめ近郊には大学も多く、そういう若い人たちの頭脳も大いに使わせていただきたいと思っています。

〝人工下僕〟をいかにうまく使うかが問題だ

――ソフトウェアというと、私どもは直ぐに研究所ということを思い浮かべますね。

関本　うーん、研究所ではないですね。そういう面ももちろんあるわけですがね。

昭和六十年頃にはオペレーションをスタートさせようと思っておりますが、六十年には「ユニバーシアード神戸大会」が西神地区で行われ、地下鉄も完成しますね。そういう〝足〟が整備される頃には動き出すということで考えております。

神戸市は、西神工業団地で〝太陽と緑のインダストリアルパーク〟をキャッチフレーズにしておられますが、そこにあるのは西神工業団地の他に、住宅（西神ニュー

タウン）が出来るし、また、学校も出来る。いわゆる産学住が混在しているわけです。二十一世紀へ向って産学住の町づくりが進められるなかで、少し野心的な実験をやってみようというのも進出の一つの目的です。

『第三の波』の著者であるアルビン・トフラーが昨年一月に日本へ来たときに私は対談をしたのですが、このときの話でも、将来の仕事のあり方として在宅勤務という話をしました。例えば工場や会社にあるコンピューターと家庭での端末機とで仕事を進めて行くようになるだろうということがイメージとしてはあるんですよ。

そこで私どもが造る工場と住宅や学校との関係ですがデーターベースという形で学校にあるいろいろな情報をどういうふうに工場で産業として活かして行くか、逆に産業のなかにある情報を学校での教育や研究にどう活かして行くか、こういう産学のあり方も模索してみたいですね。私たちはこれをC&C、つまりコンピューターとコミュニケーションの結合のシステムと言っています。

私はこれをまた〝人工下僕（しもべ）〟と呼んでいるんですよ。コンピューターは人工頭脳、通信は人工神経。また音声入力というものも昭和三十三年から私自身開発に従事していましたが、言ってみればこれは人工聴力。ロボットなどは人工手足に相当します。そしてこれらをつくっている人工細胞が半導体ICなんですよ。しかし、それだけじゃダメなんです。肉体だけですね。知性が必要です。それがソフトウェアなんです。

こういう人工下僕が産業と学校との関わりのなかでどういうふうに役立って行くだろうか、あるいは住宅と工場との間でどう役立って行くだろうか、さらに家庭と学校との間でどう役立って行くか、それをソフトウェアの面で研究することが、ある意味では日本の二十一世紀のあり方、さらに世界で初めて産学住の問題を実験的に研究して行くことになるのですね。その意味から言うと、明日を拓く先端的な国際都市という神戸のイメージと私が今言った仕事とがうまく結びついて来るのじゃないかと思っておるんです。もちろん、実験ばかりやるのじゃなくって（笑）着実にソフトウェアをつくるとか、研修施設なども置いて行こうということも考えています。

西神インダストリアルパークの進出を決定してからは神戸のいろいろな関係の方と接触していますが、やはりセンスを持った方が多いですね。「明日を拓く先端の国際都市」であって欲しいし、着々とそういう町づくりをやっておられることをお伺いしております。ある意味での合理性と厳しさのなかで将来のビジョンを描いて歩んでおられるということは神戸人の一人として心強いことですし、また、われわれ先端技術を持った者がインダストリアルパークなどにも協力申しあげ甲斐があることだと思いますね。

――今度の工場は、装置的に見るとどうなるのですか。

関本　装置的にはコンピューターを置き、端末機を利用してソフトウェアをつくります。コンピューターによってコンピューターのソフトウェアをつくると言うことですね。ただ、重要なのは人間性を無視してC&Cシステムを設計してはいけないということです。人間はある習性を持っていますね。これは時代とともに、また知的レベルとともに変わるわけですが、人間の習性を尊重しなければ、人工下僕は伸びて行かないんです。使いにくいんじゃダメなんですよ。人工下僕の知的レベルも上って行かなくちゃいけない。それがソフトウェアなんですね。それで使いやすくなって来るわけです。

創意工夫がないから機械に負けるのだ

――ところで、二十一世紀への将来ビジョンについてはどう見ていらっしゃいますか。

関本　二十一世紀に向ってこれからどうなるかを考えますと一言で言うと情報社会の到来ですね。これに向って今、世の中はとうとうと動いているんですよ。

いわゆる工業の全体の産業のなかで占める割合が七十年代の初めから下って来ている。むしろ情報業であると

かサービス業であるとか、柔らかい産業が伸びて来たし、これからもどんどん伸びて行くと思いますね。

これからの世の中はやはり情報社会ですが、情報の重要性には二つの面がありますね。一つは情報を使ってうまく仕事をする。情報を使っていかに効果をあげて行くかということですね。二番目は、情報自体に価値を持たせ売買することを業務とすること。これも増えて行きますね。日本では情報をお金に換算することが弱いけれど、今は着々と世の中が変って来ています。

情報というものの価値、ソフトウェアというものの価値。これがこれから段々と増えて行くでしょうね。

――関本社長は以前に『CATVの設計と工事』という本を出版されていますが、CATV（有線テレビ）など新しいメディアも今後活用されて行くでしょうね。

関本　日本も新しい情報社会のなかで、画像情報をもっと世の中に広げて行くことを期待するムードが一層高まるでしょう。そうなれば同軸ケーブルを使ったCATV、さらに光ファイバーや衛星通信まで含めたニューメディアが大いに活用されるでしょうが、これらをどう活用するかは人間の知恵の問題ですね。ハードウェアはどんどん進んで行きますが、問題はどうそれを利用するかです。

私が盛んに言っているのは、何事もそうですが、人間が尊重され、人間の能力が育成されなければいけないということです。人間が人間である存在理由は何かと言うと創造性ですね。創意工夫力があるということですよ。世の中では機械が発達して来ると人間が疎外されるという悲観的な見方をされる方もありますが、私は逆に大変楽天的なんです。

要するに機械がやれることは大いに機械にやってもらう。人間しか出来ないことにもっと人間が時間を割いて、また自分で勉強する時間をとって、人間にしか出来ないことをやって行く。これが何よりも大切ではないかと思うんですよ。

何よりも人間が財産です

――とくに日頃からお好きな座右銘はおありですか。

関本　人世訓と言いますか、〝偶然と必然の織りなすなかで、人間による人間のための人間の営みがある〟というのが私の好きな言葉なんです。

どういう意味かと言いますと、私は社長になる二年ほど前に販売担当の専務をやったのですが、そのときにこういうことを感じたんです。販売には、確かにコンピューターも使いますよ。だけどそれが財産じゃない。本質的にはそこにいる人間、販売する人、また販売を通じておつき合い申し上げる御得意様、そういう人間が宝なんだと感じました。私自身は昭和二十三年に日本電気に入りましてから約二十年間研究所におりましたが、ある意味で理に走るというか冷たいと思われる研究所生活を振り返ったときに、そこにあったのはやはり人間の営みですね。大変難しいことに対して心を燃やして挑戦して行く研究者の姿あるいは、そういう雰囲気をつくり出して行く研究管理者の姿、そこにあるのはやはり心を持った人間ですよ。人間の心が燃えない限りいい仕事は出来ないんですよ。

さらに、十年間は工場の管理者あるいは担当役員として物づくりの生活を送ったのですが、省力化機械＝ロボットが向こうから歩いて来るんじゃないのですね。導入するのかどうか、導入したらどう使うかは、やはり最終的に人間の心なんですよ。人間の心が一番重要だと思いますね。

とくにソフトウェアの仕事になればなるだけそうですよ。それとセンスと言うか感受性。人間の持っている感受性は人によって違うし、訓練され経験を積むことによって深まり広がる。ファッションの世界もそうだと思うのですが、そこにあるその人の持っている素質、そのレベルは一流になればなるだけ、私は努力を越えたものがあると思っています。そして私はそうした人々が輩出す

ることこそこれからの日本にとって欠かせないことだと思うのです。これから日本が国際社会のなかで生きて行くためには、ただ追いつけ追い越せだけではダメです。やはり分に応じた形の創造性へのコントリビューション（貢献）をしないといけない。それにはそういう人材をつくり上げないといけないわけですよ。

それには教育の役割が大切になります。教育とは〝広く機会を与え、適性を峻別し、厳しく鍛える〟ことだと思います。今までで広く機会を与えるようになりましたから、これからは素質を峻別して、そして厳しく鍛えることですね。仕事仕事によって鍛える年頃が違うはずなんです。音楽家なら二、三歳ぐらいでしょうね。年頃に合った素質を見分けることをもっとシステマティックに国の政策としてやるべきだということを言い始めているんですよ。別の言葉で言えば創造性開発を科学しようと言っているのです。

自信と謙虚を行動のなかでアウフヘーベンさせる

――確かにそれは重要なことですね。教育の根幹に関わることですね。

関本　人は人を知ると言いますね。人の素質を見抜ける能力があるかないかも大変な素質ですよ。あるレベルを持たないと見抜けない。私が盛んに言っているのは適性を見出すことだということです。人それぞれには適性があるんですからね。

東大の理学部に西島＝ゲルマン理論でノーベル賞レベルの仕事をした西島和彦という教授がいます。彼とは物理で同期だったんですが、あっちは出来るがこっちは出来なくて（笑）、物理屋になることを悲しくもギブアップしたんですよ（笑）。姫路高等学校時代に一流の物理学者になることを夢見たことがない、と言ったら嘘になりますね。だけどね、それは相対的なものですよ。大木が傍にあって自己の惨めさを感じたときには、今までの夢にこだわっていてはいかんということでしょうなぁ。結果から言えば今がなれの果てですが（笑）。

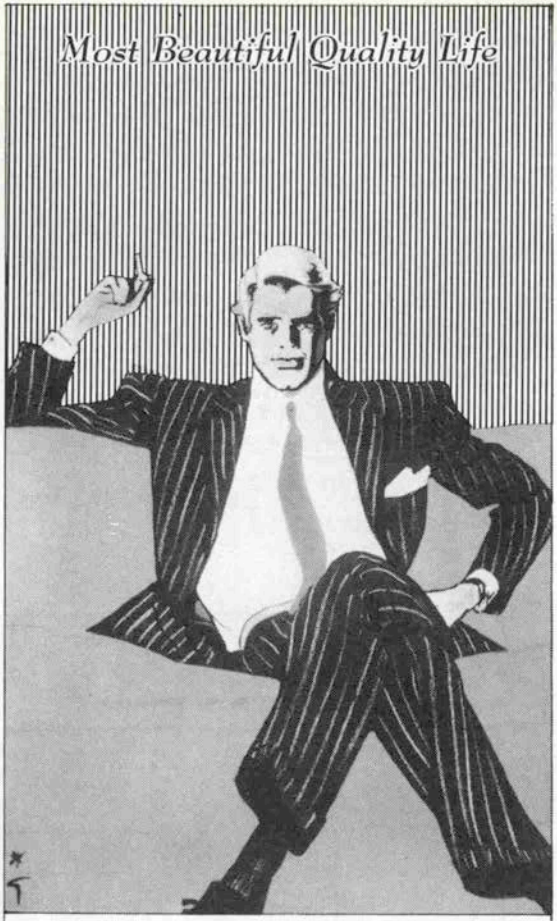
でもある意味では幸せだったと思うんですよ、彼が傍に居たということは。もし彼が居なければ、あるいはどこかの大学で物理を教えていたかも分らない。そうでないかも分らない。そこに偶然と必然があるんですよ。世の中のことというのは理屈だけじゃない。偶然にある人が居たとか居ないとかね。あんまり深刻になったら世の中を渡れないですよ（笑）。自信を持たなければ仕事は出来ない。しかし一方、やはり謙虚でなければいけない。だから自信を持つということと、謙虚ということは一見概念から言うとアンチテーゼになるようだけれど、それを併存させなければいけないんですよ。これを行動のなかでアウフヘーベン（止揚）させなければいけないでしょうね。頭じゃない。行動のなかでそれが統一されるんじゃないでしょうか。

――そういう関本社長の目からご覧になって、これからの国際社会での日本はどうあるべきだとお考えですか。

関本　今、貿易摩擦ということがよく言われていますが、やはりモノはちゃんと言わなけりゃいかんですね。謙虚でありながら、なおかつ自信を持って言わないといけない。自信を持ちながら相手の言うことをよく聞くという謙虚さもないといけない。自信と謙虚との兼ね合い、それと国際感覚が大切ですね。やはり井の中の蛙じゃいかんでしょうね。国際感覚をもった自信と謙虚さが必要ですね。

神戸は国際都市であるということと、ファッション的なセンスがある町ですが、そういう偶然と必然のなかで生まれ育ったということの恩を今日改めてかみしめています（笑）。少なくとも中学四年まで神戸に居たということは、内なる自我の芽が少し大きくなろうとしている頃の経験として、今日の身体の一部になっているんでしょうねぇ。

（KOBE21Cにて）



創業明治十六年

金 柴田音吉洋服店

神戸・元町4丁目南　TEL.(078)341－0693
大阪・高麗橋2丁目　TEL.(06) 231－2106

清々しい可憐さを

美容室 エリザベス

本店／神戸市中央区三宮町2丁目6－4三宮神社北東
三上ビル3F　TEL078 (331) 8894・4917
花嫁衣裳サロン／畑尾芙久子の店
本店美容室エリザベスのTEL078 (331) 3258
専属結婚式場／生田神社会館・阪急六甲山ホテル
蘇州園・北野クラブ・プラン ドゥ プラン他